

京都文化カプロジェクト

2016
|
2020

創造する文化 京都から世界へ

The Creative Power of Culture: From Kyoto to the World

Vol.2

新たな創造力に触れる

- | | |
|--|--|
| 1 京都文化カプロジェクト機関誌に寄せて
冷泉 貴実子 | 15 アスリートから見た京都 乾 友紀子／荒賀 龍太郎 |
| 3 東京キャラバン in 京都 | 17 オリンピックと文化創造 吉本 光宏 |
| 9 創造性を育む京都の魅力を語る
森田 りえ子／中川 晴雄／楠 泰彦／堀木 エリ子
茂山 逸平／三浦 基 | 19 京都文化力向上宣言
青柳 正規／有馬 頼底／池坊 専好／太田 達／細井 浩一 |
| | 21 京都文化カプロジェクト2016-2020が目指すもの |

京都文化力プロジェクト機関誌に寄せて



冷泉 貴実子

公益財団法人 冷泉家時雨亭文庫 常務理事
京都文化力プロジェクト実行委員会 名誉顧問
(敬称略)

「奥山に もみぢ踏み分け 鳴く鹿の 声聞く時ぞ
秋は悲しき」

百人一首にあるこの和歌をご存じの方も多いでしょう。この和歌が詠まれたのは、千年以上も前のこと。けれど現代の私達でもその意味を理解し、歌に込められた抒情を感じ取ることができます。こうした「言葉」に代表されるように、日本では千年以上にわたって文化が途切れることなく連綿と継承されてきました。これだけ長い歴史を持ち、洗練された文化を持つ国は、世界でも稀有な存在です。

中でも京都は、平安の都ができてから1,200年余り、一度も都市としての機能を失うことなく今日まで続いてきました。数多くの神社仏閣、古い民家や



町並みを今に残すだけでなく、そこに生活と文化を宿しているところに京都のすばらしさがあります。

およそ800年続く冷泉家の屋敷も、1790年に再建されて以来、完全な姿で現存する唯一の公家屋敷として現代まで受け継がれてきました。1981年に「冷泉家時雨亭文庫」という公益財団法人が発足するまでは、750坪ある家屋の維持に困り果てたこともありました。それでも屋敷はもとより、藤原定家が筆写した『古今和歌集』をはじめ数多くの貴重な古典籍を守り抜くことは、「日本の文化を守る」冷泉家の矜持であると覚悟を持っていました。

京都には、同じように長い歴史と文化を持った建造物が数多く残っています。ガイドブックに掲載されているような有名な神社仏閣でなくても、街を歩けば、そこかしこに門を開いた古刹が目に入ります。京都を訪れる方々には、そうした日常に息づく文化にも目を留めていただきたいと思います。

貴重な文化を次代に引き継いでいくためには、「公」の支援が欠かせません。古い建物を維持するのにも、庭木を美しく保つのに費用がかかります。世界に冠たる京都だからこそ、誇りを持って文化の維持に力を尽くしてほしいと願わずにはおられません。

現代の世界で軍勢力や政治力、経済力は、人を制する圧倒的な力になるかもしれませんが、それをもって尊敬を得ることはできません。けれどたとえその国のことを知らなくても、言葉が通じなくても、

不思議と文化の高さは伝わるものです。そしてそれはすぐ尊敬につながります。文化とは、すなわち気品です。日本も文化によって尊敬される国であってほしいと思っています。

2020年に向け、京都の文化力にさらに磨きをかけ、京都から日本全体の文化的地位を高めていけたらすばらしいと思います。そのために京都文化力プロジェクトの取組が大きな力になることを願っています。



新
創
触
れ
る
力
な
1
に

2020年、そしてさらなる未来へ、
日本を、世界を一つにする「文化ムーブメント」

東京キャラバン in 京都

東京2020オリンピック・パラリンピック等に向けて日本の文化首都としての京都の魅力が日本、そして世界に示すとともに、世界の人々と協働し、熱気と興奮の増場から新たな創造の潮流を起こす。そんな京都を舞台に行われる文化と芸術の祭典「京都文化力プロジェクト」が始動したのは、2016(平成28)年のこと。そして2017(平成29)年、京都文化力プロジェクトのパフォーミングアーツ(舞台芸術)のリーディング事業として、東京都及びアーツカウンシル東京との共同開催で「東京キャラバン in 京都」が開催された。

東京2020オリンピック・パラリンピックを契機に人々の心に「文化」の種をまき、さらに2020年を越えて未来へと続く文化活動の基盤となることを目指す東京都の文化事業として始まった「東京キャラバン」。劇作家・演出家の野田秀樹さんが総監修を務め、国内外の多種多様なアーティストが参加して、本来なら交わることのない多分野の表現者たちの「文化混流」によって生まれるパフォーマンスを東京や東北、さらにはブラジル・リオで発表してきた。

東京キャラバンの主旨に共鳴し、京都

文化力プロジェクト実行委員会が主体となって開催地に立候補。全国44もの自治体の候補の中から京都が、2017年最初の開催地に選ばれた。

千年以上もの長きにわたって豊かな文化を育み、受け継いできた都市でありながら、先進技術で世界に名を馳せる数々の企業が林立するものづくりのまちでもある京都。新旧入り混じる国際都市・京都でさまざまなアーティストの技が交じり合い、10年後、100年後の未来へ、どんな「文化ムーブメント」のレガシー(遺産)を残すのだろうか？



作品を創造する過程が面白い。

8/19(土)、20(日) 公開ワークショップ in 京都・亀岡

2017(平成29)年8月19日(土)、20日(日)、京都府亀岡市。二条城でのパフォーマンス本番を控え、参加アーティストやクリエイターが集まって公開稽古を行うワークショップが開催された。通常は完成された作品しか目にする機会はないが、「実は作品を創造する過程にもおもしろさがたくさんある。その創造過程も見せてしまおう」というのが「東京キャラバン」のユニークなところだ。

1日目は総監修の野田さんを筆頭に、フードクリエイションの諏訪綾子さん、パフォーマーの「東京キャラバン」アンサンブルに加え、京都から祇園甲部の芸妓の佳つ菊さんと舞妓の豆千佳さん、球乗り型ロボット・村田製作所チアリーディング部が参加。2日目はさらに祇園祭鷹山保存会の囃子方や津軽三味線「小山会」、和太鼓「Atoa」、書道家・青柳美扇さん、そ

して女優・松たか子さんからアーティストが加わった。

ワークショップは真剣勝負。アーティストたちがそれぞれのパフォーマンスを披露し、それを見た野田さんがその場で演出をつけていく。「いったい何をするのか、どんなアーティストの方と一緒するのか、不安を感じつつもワクワクしていました」と、村田製作所の吉川浩一さん。彼らが操作する球乗り型ロボットは、芸妓・舞妓と一緒に京舞「六段くずし」を舞うことになる。「先端技術を結集したロボットと京都の伝統文化が融合することで、新しい文化を生み出すことができれば」と意気込む。

2日目には、祇園祭鷹山保存会の囃子方が並んで演奏する間を、「東京キャラバン」アンサンブルのパフォーマーたちが縫うように行き交うコラボレーションが実現した。ゆったりと、流れるような祇園囃子

に「今」を象徴するアクティブなパフォーマンスが交わり、不思議なコントラストが生まれていく。

「芸妓・舞妓さんや祇園祭鷹山保存会からのパフォーマンスの背後には、『伝統』という膨大な『時間』の流れがあります。時間をかけて積み重ねられてきた文化の重さや長さの力を借りることで、時を越えて未来へつなげていく新しいものが生まれる、そんな奇跡のような瞬間に立ち会えるかもしれません」。野田さんは、京都ならではの「混流」の可能性をこう語る。

さらに和太鼓や津軽三味線、書道家らによる異種文化混流が、野田さんの手腕で物語を紡ぎ出していく。そうした創造の過程を観客たちは大いに楽しみ、「間近で見られて大感激です」「だんだん場が温まって、表情がやわらかくなっていくのがよく分かり、面白かった」などの感想も寄せられた。



世界遺産・二条城で繰り広げられた文化フェスティバル。

9/2(土)、3(日) パフォーマンス in 京都・二条城



9月2日(土)、3日(日)の2日間、世界遺産に登録されている二条城の国宝・二の丸御殿前に設けられたステージで、「東京キャラバン in 京都・二条城」のパフォーマンスが披露された。事前応募による抽選に当たった合計850名を超える観客が、多種多様な分野のアーティストたちによる見たことのない「混流」に魅了された。

空が赤い夕焼けから群青色に変わる黄昏時、秋の訪れを感じさせる涼やかな風が吹き抜ける二条城。開場の合図と

ともに唐門をくぐった来場者は、ミステリアスな雰囲気を感じたフードクリエイションのパフォーマーたちに迎えられ、壮大な文化フェスティバルの世界にいざなわれた。

夜の闇が濃くなる頃、照明に照らされ、荘厳な雰囲気をたたえる二の丸御殿の頭上に「牙え 牙え」とした月が昇った。幻想的な音楽に導かれるように観客が席につくと、最初に祇園甲部の芸妓の佳つ菊さんと舞妓の豆千佳さん、そして村田製作所

の球乗り型ロボットが舞台上で登場。三味線と唄に合わせ、「六段くずし」を舞い始めた。ワークショップから10日余り、それぞれに練習を重ねてきた成果が表れ、二人と二体の息はぴったりだ。

祇園甲部は江戸時代初期から続く花街。芸妓・舞妓はお茶屋の文化、伝統伎芸といった無形文化を受け継ぐ存在でもある。佳つ菊さんは舞台上、「最先端のロボットと共演するのは初めて。でもお師匠さんに日頃教わっていることを一生懸命

やり遂げるのは変わりません。観客の方々には新旧の異なる文化が交わるのを楽しんでいただきたいと思います」と語っていた。

一方、村田製作所の吉川浩一さんは「芸妓・舞妓さんと一緒にロボットを踊らせてみて、双方の『静』の動きに親和性を感じました」と語る。先進のテクノロジーで体の傾きを感じて、前後左右に小さく動きながら球の上で懸命にバランスをとり、芸妓・舞妓さんの舞いとシンクロする姿は、ロボットながら何とも微笑ましい。吉川さん

は言う。「京都生まれ、京都市育ちの企業だからでしょうか。当社にも京都文化のマイナードが息づいていると感じました。」

「普通なら決して出会わないものが出会った時に新しいものが生まれる。文化はそうやって創られてきたのだと思います。芸妓・舞妓さんとロボット、伝統と先進の出会い、京都でしか見られませんか」と総監修の野田秀樹さん。その言葉どおりの奇跡のようなコラボレーションが実現した。

芸妓・舞妓と球乗り型ロボットが舞を

終えると、夜空に澄んだ歌声が響き渡り、EGO-WRAPPIN'の中納良恵さんがアカペラで歌う「夜来香」が会場を別世界に変えた。次いで、「小山会」による津軽三味線が鳴り、コントラバスのリズムが低く重なる。その音色に合わせ、般若の能面をつけた能楽師の津村禮次郎さんが刃を閃かせて舞台上で登場した。歌い続ける中納さんと対峙しながらパフォーマンスを披露し、二条城内は一気に緊張感あふれる空気に支配された。

「二条城が舞台と聞いてすぐに思いついたのが日本で古来語り継がれてきた『鬼』というモチーフです」と野田さんが語るように、舞台には次々と「鬼」が登場し、独特の世界を繰り広げた。

続いて躍り出てきた「Atoa」の二人。和太鼓の激しい響きに、観客たちも自然と手拍子を打ち、盛り上がる。そんな和太鼓の力強いリズムと競い合うように津軽三味線のバチさばきもどんどん強く、速くなっていく。音の競演が最高潮に達した瞬間、楽器が鳴り止み、会場が静まり返った。

そこで一打、打ち鳴らされた太鼓を合図に鉦と笛の祇園囃子が始まり、ゆっくりとした足取りで鷹山保存会の囃子方16名が舞台中央に進んできた。「コンチキチン」という独特の祇園囃子に耳を傾けた野田さんは、「音色で『速い時間』を表現できるのがすばらしい。現代の我々の忙しい時間とのコントラストがおもしろいと思いました」と、「東京キャラバン」アンサンブルとのコラボレーションの意図を語る。

祇園祭の山鉦の一つである鷹山は、応仁の乱以前から巡行していたと伝わる由

緒ある曳山だが、1826(文政9)年の大雨で懸装品が損傷し、翌年から190年以上にわたって休山が続いている。近年復興の機運が高まり、2014(平成26)年に囃子方が復活。2021(平成33)年に巡行に再び咲くことを目指し、現在、8歳から64歳までの囃子方が毎月3回、鉦、笛、太鼓の稽古に励んでいる。鷹山保存会の代表を務める山田純司さんは「復活には多くのの方々のご支援が欠かせません。『東京キャラバン』を通じて、日本中、世界中の方々に『鷹山』を知っていただきたい」と参加の理由を明かす。さらに現代に鷹山を復活させる以上に難しいこととして、山田さんは「その後も続けていくことと、未来

を見すえた。『復活させた鷹山を100年、200年後に引き継いでいくことこそが大切だと思っています』。



伝統と先進、 和と洋の垣根を越えた アーティストたちの競演。



触
れ
る
1
創
造
力
に
新
た
な

舞台はいよいよ佳境。ヴァイオリン、コントラバスなどの弦楽器に津軽三味線、琴、和太鼓が加わり、和洋混交の音色が「ハンガリー舞曲」を奏でる。演奏に合わせ、りりしい甲冑姿の女性が一人、登壇した。書道家・青柳美扇さんが、背丈ほどある漆黒の大画面にゴールドに輝く「魂」の文字を力強く書き上げると、会場から大きな歓声と拍手が上がった。

続いて、女優・松たか子さんが登場。この日のために野田さんが書き下ろし、ワークショップを通じてパフォーマンスを創り上げた朗読「夏の魂の中で」が始まった。夏の草原でかくれんぼをしていた少年が鬼と遭遇する。そんな神秘的でどこか恐ろしいが雰囲気を感じさせる音楽を担当するのは、京都在住の音楽家・原摩利彦さんだ。「これまで東京やリオで開催された『東京キャラバン』に参加してきて、いよいよ地元・京都で披露できるのが嬉しい」と喜びを語る。

鬼たちが跋扈し、息づまる緊張と童心を思い出させるようなワクワクに満ちた

パフォーマンスの後は、松さんと中納さんによる唱歌「椰子の実」の合唱、能楽師、芸妓、「東京キャラバン」アンサンブルが次々と織りなすパフォーマンスに、観客たちは時間を忘れて見入っていた。

そして、EGO-WRAPPIN'の代表曲とともに参加アーティスト全員、そして野田さんが舞台へ上がり、カーテンコール。観客の大きな拍手はいつまでも鳴り止まなかった。

今宵限りのパフォーマンスに酔いしれた来場者からは、「芸妓・舞妓さんとロボット、邦楽と洋楽といった異種のコラボレーションが印象的でした。二条城の中夏の草原でかくれんぼをしていた少年が鬼と遭遇する。そんな神秘的でどこか恐ろしいが雰囲気を感じさせる音楽を担当するのは、京都在住の音楽家・原摩利彦さんだ。『これまで東京やリオで開催された『東京キャラバン』に参加してきて、いよいよ地元・京都で披露できるのが嬉しい』と喜びを語る。鬼たちが跋扈し、息づまる緊張と童心を思い出させるようなワクワクに満ちた



東京キャラバン 総監修
野田 秀樹

今回の東京キャラバン in 京都では、京都の文化を担う芸妓さん、舞妓さん、祇園祭鷹山保存会の囃子方のみなさんをはじめ、女優の松たか子さん、EGO-WRAPPIN'の中納良恵さん、能楽師の津村禮次郎さんなど、人と人が交わり、新しい文化が生まれるというコンセプトに賛同する表現者らが集まり、普段出会わないもの同士が出会い、ジャンルを超越した“文化混流”により素晴らしいパフォーマンスを創出しました。

このような素晴らしい表現者たちとの出会いによって、新しい文化が生み出されていく取り組みが、2020年までの3年で終わるのではなく、東京2020オリンピック・パラリンピックの遺産として2020年の先々へ続いていくのかなと思っています。

未来へ受け継がれていく 文化のレガシー。



開催概要

東京キャラバン in 京都・亀岡(公開ワークショップ)
日時：平成29年8月19日(土)13時～17時、20日(日)10時～17時
会場：生涯学習施設・道の駅ガリアかめおか「コンベンションホール」

【参加アーティスト】

野田秀樹、松たか子(女優)、諏訪綾子／フードクリエイション(アーティスト)、住つ菊(祇園甲部芸妓)、豆千住(祇園甲部舞妓)、祇園祭鷹山保存会 囃子方、村田製作所チアリーディング部(秋東り型ロボット)、青柳美扇(書道家)、津軽三味線「小山会」、和太鼓「Atoa」、
【参加クリエイター】

名和晃平(美術・空間構成)／SANDWICH| 木村舞(美術)、ひびのこづえ(衣装)、原摩利彦(音楽)、大曾根浩範(編曲)、井手茂太(振付)、青木兼治(映像)、井上高和(写真)

東京キャラバン in 京都・二条城

日時：平成29年9月2日(土)、3日(日)19時～20時
会場：世界遺産・二条城 国宝・二の丸御殿前 特設ステージ

【参加アーティスト】

野田秀樹、松たか子(女優)、中納良恵/EGO-WRAPPIN'(ミュージシャン)、津村禮次郎(能楽師)、諏訪綾子／フードクリエイション(アーティスト)、住つ菊(祇園甲部芸妓)、豆千住(祇園甲部舞妓)、祇園祭鷹山保存会 囃子方、村田製作所チアリーディング部(秋東り型ロボット)、青柳美扇(書道家)、津軽三味線「小山会」(小山香、小山浩美、小山貴裕)、和太鼓「Atoa」(高橋勲雄、高橋亮)、大谷祥子(争曲家)、勝井世子(争曲家)、ストリングスチーム(湯見日南子、喜瀬麻衣、山本みなみ、太田かなえ、石巻久、巳崎智介)、
【参加クリエイター】

名和晃平(美術・空間構成)／SANDWICH| 木村舞(美術)、服部基(照明)、ひびのこづえ(衣装)、原摩利彦(音楽)、大曾根浩範(編曲)、赤松綾利(ヘアメイク)、井手茂太(振付)、青木兼治(映像)、井上高和(写真)

【協力】

ULTRA SANDWICH PROJECT#13(美術制作)、WLK(和動物)

新
た
な
創
造
力
に
触
れ
る
2

創造性を育む京都、
その魅力を語る



日本画 と 創造

日本画家

森田 りえ子さん

花街には俗世とはかけ離れたミステリアスな魅力がある。日本画家・森田りえ子さんは、そんな京の花街に魅了されて足しげく通い、舞妓を描き続けてきた。「『歩く伝統工芸』といわれる華やかな着物や帯、髪飾り等、細部にまで細やかな季節感が表現されていたり、屋形（置屋）のお母さんから何う花街のしきたり一つひとつにも日本の美意識が詰まっていて、描きがいがあります」と語る。

小説や絵画など舞妓や花街を題材にした作品は数多いが、日本画はその世界をひととき艶やかに描き出す。「日本画の真骨頂は、天然の鉱石を砕いた岩絵具の美しさにあります」と森田さん。岩絵具を膠液で溶き、画面に塗ると、やがて膠が沈着して、まるで宝石のような輝きが前面に表れる。その色彩は、軸や巻物のみならず、襖絵や天井画として神社仏閣や建物を鮮やかに染めてきた。

2007年、森田さんは金閣寺（鹿苑寺）本堂の杉戸絵及び客殿の天井画を手が

けた。歴史上の名だたる絵師たちと肩を並べ、100年後、200年後の未来に作品が残っていくことになる。「その覚悟を持って、全身全霊で描きました」と森田さん。「時とともに美しく変化するのも岩絵具の魅力の一つです。真新しい白木の杉戸も100年後には琥珀色に変化するでしょう。そうした木材の深さに馴染むよう考えながら四季の草花を描きました」と明かした。

花鳥風月といった伝統的な題材だけでなく、従来の日本画にはない新たなテーマにも果敢に挑む森田さん。「今の舞妓さんは伝統を背負いながらも普段は携帯電話でSNSに興じる普通の女の子。そんな『今』を描きたい」と言う。ミニスカートに携帯電話を持った茶髪少女、さらには変身願望の少女群「GITAI（擬態）シリーズ」など、鍛練に裏づけられた確かな筆致で斬新な表現を追求し、日本画の新境地を開いている。

「京都には歴史ある寺社がそこかしこにあり、四季折々の草花や国宝級の文化財を日常的に目にすることができます。芸術家にとってこれほどすばらしい街はありません」と森田さん。千年を超える文化に刺激を受けながら、未来へ続く美を創造している。



伝統文化を背負った舞妓から
ミニスカートの少女まで
100年後を見据えて「今」を描く。

数百年を経ても輝き続ける白。 後世に残る日本の美術・工芸を支える顔料を作る。



雛人形の顔に能面、日本画や神社仏閣の彩色に用いられる清々しくも柔らかな白色。それは貝殻などを砕いた粉から作られる顔料で、胡粉と呼ばれる。

「宇治は、江戸時代から胡粉製造の盛んな地域として全国に知られてきました」と、ナカガワ胡粉絵具株式会社の代表取締役・中川晴雄さんが歴史をひも解いた。胡粉は、正倉院伎楽面に使用されたことが発見されているほど長い歴史を持つ。室町時代から絵画や建造物の彩色に使われる他、工業材料としても用いられた。中でも天然のイタボガキの殻だけを原料

とする京胡粉は最高級品とされ、一流の絵師や職人に重用されてきた。

数百年を経ても失われないその輝きは、途方もない時間と努力によって作られる。まずイタボガキの貝殻を天日でさらして風化させ、炭酸カルシウムなどの堆積層を形成させるのに10年余り。その後、粗く砕いて水と練り合わせ、石臼でさらに細かく粉砕する。最後に水中に沈殿・たい積させたものを天日で乾燥させ、ようやく完成する。ナカガワ胡粉絵具は、今も伝統的な製法を守って胡粉製造を続けている数少ない企業だ。「神社仏閣の壁画や襖絵の

修復、伝統工芸品の製造に京胡粉は欠かせません。こうした芸術を後の世に残していくために、胡粉を作り続けることが私たちの使命だと思っています」と中川さんは覚悟を語る。

胡粉と同じく岩絵具も日本画に用いられる貴重な材料だ。天然の鉱物を砕いて作る天然岩絵具に加え、細に金属酸化物を混合し、高温で溶かして天然鉱物に近い原石を作る新岩絵具がある。ナカガワ胡粉絵具では、粒子の粗さを緻密にコントロールすることで多彩な色や濃度を生み出し、1,400種類もの岩絵具を描える。さらに新しい岩絵具の開発も手がけている。「現代の日本画は、化学物質に晒されています。密閉率の高い住宅で、耐火材や石膏ボードなどから発する微量のホルムアルデヒドや排気に含まれる硫化水素などが少しずつ蓄積して岩絵具の退色を招きます。そこでこうした化学物質に耐性の強い岩絵具を開発しました」と説明した中川さん。

伝統的な製法を守り続ける京胡粉と現代の環境に適した新たな岩絵具の両方で日本の美術・工芸の今を支えている。



ナカガワ胡粉絵具株式会社 代表取締役

中川 晴雄さん

胡粉 と 創造





新
た
な
創
造
力
に
触
れ
る
2

創造性を育む京都、
その魅力を語る

織物 と 創造

クスカ株式会社 代表取締役

楠 泰彦さん

伝統的な手織りの技術を用いて
現代のライフスタイルに合った製品を作り、
伝統産業の息を吹き返す。



奈良時代から1,300年余りの歴史を持ち、絹織物の一大産地として栄えた丹後。しなやかな肌触り、シボと呼ばれる細かい凹凸の乱反射によって豊かで深みのある色を醸し出す丹後ちりめんは、京都市の室町を中心とした問屋に卸され、最高級の着物に仕立てられた。しかし洋装の普及と経済不況によって着物を跳ね返る文化が失われ、かつては一日中機を織る音が賑やかに響いていた機織りの街も、今ではすっかり静かになってしまった。

そんな丹後ちりめんの産地・与謝野町で、今、昔ながらの手織りの技術に現代のファッションを融合させることで、伝統産業の息を吹き返そうとしている人がある。クスカ株式会社を率いる楠 泰彦さんだ。

「丹後の絹織物産業を次の世代に引き継いでいくには、大量生産の機械織りには真似できないもののづくりが必要だと考えました」と楠さん。丹後ちりめんの白生地を製造してきた生家の三代目を継いだ時、思い切って機械織りを止め、「手織り」に一歩化した。

工場には今、ボタンボタンと心地よい機音が響く。職人が手機でひと越しひと越し糸を通して織り上げると、糸と糸との間に空気を含み、生地はふっくらとした立体感を持つ。加えて経糸に黒糸を用いることで、絹独特の光沢に深い陰影が重なり、何ともいえない風合いを醸し出す。職人によって糸の締め具合が微妙に異なるため、それぞれが「一点もの」としての個性を放つのも手織りの魅力だ。

しかし何より楠さんがこだわったのは、「伝統的な織技法を用いながら、現代のライフスタイルに合うものを作る」ことだった。ブランドを立ち上げ、ネクタイなどのメンズ服飾雑貨を中心に商品を開発。「伝統技術を現代のスタイルで活用できるようなモダンイズさせる。その名も『リメイクテクノロジー』が、伝統産業を生き返らせるカギでした」と楠さん。商品は今、国内に留まらず、海外のバイヤーからも注目を集めている。京都の着物文化を支えてきた絹織物が、新しい価値を付与され、未来へそして世界へと羽ばたこうとしている。



ガラスのなかった時代、日本の家屋では、障子が明かり取りの役割も果たしていた。「白木の枠に貼られた真っ白い和紙を隔てて向こうに動く人の気配を感じたり、月の光や紅葉の赤が部屋をそこはかなく照らしたり、障子には情緒・情感を醸し出す日本特有の美しさがあります」。そう語る和紙デザイナーの堀木エリ子さん。太陽の傾きによって影が伸び、濃淡が変わり、和紙は刻々と表情を変える。堀木さんはそうした時間の経過や光の変化による「移ろい」に和紙の魅力を見出す。

しかしマンションや洋風住宅が主流となり、また安価で大量生産が可能な紙が流通する現代では、和紙の用途はますます少なくなっている。「使い道のないものはやがて減びてしまいます。和紙を次に残したいなら、機械漉きにはない特長を生かすしかありません」と堀木さん。手漉き和紙は丈夫で簡単に破れたり、退色したりしない。それどころか長く使うほど風合いが増していく。「長く使う」場こそ和紙の強みを最大限生かせると考え抜いて、た

どり着いたのが、手漉き和紙を建築やインテリアに用いることだった。

堀木さんの制作現場では、縦210cm、横270cm、三畳分もある和紙を10人がかりで漉く。3層から7層も繊維を重ねて漉き上げるのは、技術的にも体力的にも大変な作業だ。さらに層の間に楮の茎を漉き込んだり、独自の手法で水滴をたたき込み、無数の節穴のような模様をつけたり、種々の技巧によって多様な表情の和紙を作る。

「現代のお客様の要望に、和紙でしかない表現で応えること」を大切に、現代の建築や空間で生きる作品を作るのが堀木さんの信念。そのためには伝統的な製法だけに固執せず、必要に応じて新たな技術や道具まで開発してしまう。10mに及ぶ巨大な和紙をタペストリーとして吊り下げる作品では、和紙の反りを防ぐためにアルミパイプを漉き込んだ。外壁に使えるよう合わせ硝子加工を施すなど、新しい素材も果敢に取り入れる。

「オリンピックの聖火台を和紙で作り、



日本の伝統産業の魅力を世界に発信したい」と夢を語った堀木さん。想いを形にする力強い言葉と行動力で、未来に生きる和紙を作り続ける。

株式会社堀木エリ子&アソシエイツ 代表取締役
和紙デザイナー

堀木 エリ子さん

和紙の魅力は「移ろい」。
「手漉き」にしかできない表現で
建築空間に独自の環境を創造する。

和紙 と 創造



新
た
な
創
造
力
を
育
む
京
都
の
魅
力
を
語
る
2

創造性を育む京都、
その魅力を語る

狂言 と 創造

酒蔵に忍び込んで酒を盗み飲みしていたのを主人に見つかり、両腕を縄で縛りつけられた従者が、もう一人の従者と珍妙なやりとりを繰り返しながら酒を飲ませ合う。有名な狂言の演目「棒縛り」の一場面である。

「狂言は、軽妙な台詞回しと滑稽なしぐさが笑いを誘う台詞劇です。強い立場の者を弱者がからかうなど、誰も傷つけない笑いが魅力です」と語るのは、茂山逸平さん。

能と狂言を合わせた能楽の歴史は平



狂言師
茂山逸平さん

安時代末期にまでさかのぼるといわれる。男女の悲哀や合戦で命を落とす武将の悲劇などシリアスな内容を「謡い」と「舞」で表現する能と、特定のだれかを傷つけず、日常をユーモラスに描く狂言。能楽とはまったく異なる芝居が共存する不思議な芸能だ。

その中で茂山千五郎家は、京都在住の狂言師一家として400年以上の歴史を持つ。「お豆腐狂言」という言葉で語り継がれるように、「どんなところでも喜んでいただける狂言を演じる」ことをモットーに、地域の地蔵盆や祝いの席に出向いては余興に狂言を披露してきた。そうしたエンターテインメントを追求する姿勢は、逸平さんから現代の狂言師にも受け継がれている。「代々伝えられてきた芸はしっかり身につけつつ、舞台では中途半端なことはせず、『振り切る』ことを大切にしています」と茂

山さん。「お客様を楽しませること」を第一に、現代の言葉や話題も積極的に台詞や演出に取り入れ、観客を沸かせる。一方で「台詞の応酬で笑わせる伝統的な狂言のおもしろさも伝えたい」と先達を敬う気持ちも忘れない。

「京都にしていると、人と人とのつながりの深さ、長さを感じます。祖父の芸を見てきたお茶屋の女将さんから『まだまだ』とダメ出しされることも。耳は痛いですが、そうした『小さな親切』が芸の肥やしになっています」と笑う。衣装や小道具を作る職人、文化人や数寄者が通った花街などすべてが京都の伝統文化を形づくっている。その一翼を担う責任感も強い。「まずは次代を担う子どもたちのために狂言ファンを増やすことが私たちの仕事」と、全国を公演に飛び回る。「お豆腐」のように柔軟に軽やかに、次代へと狂言を受け継いでいく。

軽やかに、大胆に、
時代に合ったエンターテインメントを追求する。



演劇 と 創造

撮影：松尾紀也

コーヒーを抽出するように古典作品の魅力を抽出
時を越え、国境を越える京都発の現代演劇。



劇団 地点 代表／演出家

三浦 基さん

代表で演出家の三浦 基さんは常設劇場を構えた理由を語る。

地点は、2005年に京都で旗揚げして以来、『かもめ』『桜の園』などチェーホフの四大戯曲をはじめ、シェイクスピアなど古典と呼ばれる文学作品や戯曲を上演し続けている。三浦さんの演出の特徴は、ストーリーの断片をコラージュしたり、時には大胆にカットするなど、原作を咀嚼し、新たな解釈で再構成して見せることだ。「ヨーロッパやロシアの古典作品をどうやったら現代の観客にも刺激的に見せられるかを考え、コーヒーを抽出するようにエッセンスを引き出す」と言う。

演劇通ではない人にとって現代演劇は、難解でとつきにくいという印象を与えるかもしれない。そんな誤解を払しょくし、「演劇が特別なものではなく、日常の中にあって、気が向いたらいつでも観劇できるものになればいい」と、劇団・地点の



撮影：松尾紀也

普遍的な広がりを見せている。チェーホフをロシアで、シェイクスピアをイギリスで、さらにブレヒトをドイツでと、作家の母国で上演。眼の肥えた現地の演劇ファンから「作家の本来の言葉に出会った」と称賛を浴びた。

「京都に拠点置いて12年。世界の演劇関係者が来日した時には必ず地点の舞台に足を運んでくれるようになりました」と続けた三浦さん。いまや地点は世界に開けた日本の演劇の「窓」の役割を果たしつつある。「世界はもちろん、日本の人々ももっと身近に現代演劇に触れられるような本格的な常設劇場を京都に作りたい。伝統芸能が地域に根付き、文化を受け入れる豊かな包容力を持った京都だからこそ可能だと思っています」と夢を描く。

京都の文化のように人の心を動かしたい



京都で基礎の強化を図り ロンドンオリンピックへ

私がシンクロナイズドスイミングに興味を持ったのは、幼稚園の時のことです。小学校1年生から滋賀のシンクロクラブに通い始め、6年生の時に大阪の「井村シンクロクラブ」に移籍しました。

立命館大学への入学を機に、京都との関わりを持つようになりました。普段の練習拠点は大阪だったものの、苦手だった立ち泳ぎを練習するためにお世話になっていたのが、京都のスイミングクラブ「京都踏水会」です。最大の収穫は、ここで弱点を克服し、シンクロナイズドスイミングの基礎を強化した結果、表現力に磨きをかけることができたこと。

音楽と自分たちの演技を一体化させるうえで、表現力は重要な要素の一つです。大学4回生の夏、シンクロナイズドスイミング チームデュエット日本代表としてロンドンオリンピックに出場できたのは、京都で練習に励んだ日々があったからこそだと感じています。

私にとって大学生活は、京都の人々の温かみと、脈々と受け継がれてきた歴史に包まれる日々でもありました。そしてそれが、アスリートだからこそ感じることができた京都

の文化力の魅力だと考えています。というのも、人の想いや歴史をつないでいくこと、そのうえで進化し続けていくことは、シンクロナイズドスイミングをはじめとする全てのスポーツにも通じる部分があるからです。だからこそスポーツや京都の文化には、勝ち負けに関わらず、国境を越えて人の心を動かす力があるのだと思います。

京都は、人を惹きつける魅力が詰まった場所です。私がまだ知らない魅力も沢山あるのだと思います。私自身が東京2020オリンピック・パラリンピックを通じて京都をアピールするとしたら、京都でしか感じることのできない、この独特の空気感を伝えたいですね。国籍や価値観、文化が違っても、きっとこの温かみはわかってもらえるはず。オリンピックを機に世界中の人に足を運んでいただき、ぜひ実際に見て、触れて、味わってほしいと思います。



東京オリンピックで 想いを遂げるために

初めて日本代表として出場した2012年のロンドンオリンピックでは、デュエット・チームとも5位入賞を果たしました。また2016年のリオデジャネイロオリンピックでは、デュエット・チームとも銅メダルを獲得することができました。現在は東京2020オリンピック日本代表候補選手（ナショナルAチーム）の一人として、日々練習に励んでいるところ。目

リオデジャネイロオリンピック銅メダリスト
シンクロナイズドスイミング

乾 友紀子さん

標は、前回の銅メダルを上回る結果を残すこと。これはチーム全体の目標でもあります。

私はシンクロナイズドスイミングを通して、希望のあるところには必ず試練があるということを学びました。特にこのことを強く感じたのは、大学時代、怪我をした時でした。これはきっと、どのスポーツにも通じること。そして京都の人々も、文化を継承するなかで同じようなことを感じてこられたのかもしれない。オリンピックで銀メダル以上を獲得するという大きな希望に向かって、どのような試練も乗り越えていきたいと思っています。

今、特に力を入れているのは、演技の幅を広げること。様々な挑戦をするなかで、身体の変化を実感できるようになってきました。これからこの姿勢を貫き、東京2020オリンピック・パラリンピックでは、大変身した姿で勝負に挑みたいと思っています。

そしてもう一つ、オリンピックは、スポーツを通した人間育成と世界平和を目的とする祭典です。これまでオリンピックで演技をする時には、「戦争中の国の人々も見てくれるかもしれない」といったことも考えました。これからの京都が文化力で世界の人々の心を動かしていくように、私も演技を通して人々の心を動かせるよう、進化し続けていきたいです。

乾 友紀子

1990年、滋賀県近江八幡市生まれ。幼稚園・小学校・中学校・高校の15年間、フォーリス学園（旧近江兄弟社学園）に在籍。2006年、ロシアで開催された世界ジュニア選手権大会において、ソロ・チーム・フリーコンビネーションで銅メダルを獲得。立命館大学在学中の2012年に、ロンドンオリンピック初出場。2016年のリオデジャネイロオリンピックには主将として参加し、悲願の銅メダルを獲得した。現在は東京2020オリンピック日本代表候補選手（ナショナルAチーム）として練習に励んでいる。平成28年京都府スポーツ賞特別栄誉賞、平成29年京都市スポーツ最高栄誉賞受賞

京都と世界をつなぐ 一助となることを願って

高みを目指すプロセスで 見えてきた、京都の魅力

両親が亀岡市で空手の道場を経営しており、ごく自然に、道衣に袖を通す環境で育ちました。空手を始めたのは3歳の頃です。以来、生まれ育った京都を拠点とし、競技生活を送ってきました。

そんな私にとって京都は、遠征から戻って来た時にほっとできる、心落ち着く場所です。ただ近年は故郷としてだけではなく、世界的に高い知名度を誇る観光都市・京都としての魅力にも目を向けるようになりました。

そのきっかけとなったのは、海外の選手との交流です。海外の選手が私と練習をするために来日した際、練習の合間を縫って、京都の神社仏閣や料亭と一緒に巡りました。その時に選手たちが「素晴らしい街だ」と言ってくれたことを、今もはっきりと覚えています。京都は、空手という日本発祥の武道を習う選手をはじめ、日本に対して強い興味を抱いている世界の人々に、日本文化の良さを伝えられる街なのだと感じました。

東京2020オリンピック・パラリンピックで空手が正式種目となることが決定し、私はこれまで以上に、海外の選手と一緒に練習することを重視するようになりました。海外遠征をはじめ活発な交流を行っています。そのなかでも、世界における京都の存在感の大きさを実感させられます。というのも、ほとんどの選手が「KYOTO」を知ってくれているだけでなく、「KYOTO」の話題を糸口にして、交流を深めていくことができるからです。

空手は世界中で愛されていて、190を超える国・地域に連盟があります。競技や練習に関すること、空手に対する考え方など、海外の選手から学ぶことも少なくありません。京都が、さまざまな国の選手とコミュニケーションを

図るきっかけを作ってくれている。それによって、私のアスリートとしての成長を後押ししてくれている。そんなふう感じています。

結果を出すことが使命 そんな気概で臨んでいます

東京2020オリンピック・パラリンピックでの目標は、金メダルを獲得することです。結果を出すことによって、空手という競技をより多くの人に知ってもらいたいという思いがあります。空手には「組手」と「形」の2種目がありますが、私がやっている「組手」の見どころは、なんといってもそのスピードと駆け引き。突きや蹴りの瞬きできないほどの速さ、牽制し合うなかで生まれる緊張感が大きな魅力です。「こんなに素晴らしい競技があるのだ」ということを広くアピールするためにも、自分が結果を出す！。そんな使命感にも似た思いを胸に、日々の練習に励んでいます。2018年に入ってから、フランスでの長期合宿にも参加しました。海外選手とともに汗を流した2か月間は、空手における課題の克服だけでなく、語学など空手以外の素養を磨くことにもつながったと思います。

私は2016年、オーストラリアで開催された世界空手道選手権大会で、子どもの頃から「世界大会で優勝する」という夢を実現することができました。そして2017年には、私が住む亀岡市とオーストラリア空手連盟が、東



2016年第23回世界空手道選手権大会
荒賀道場
金メダリスト
荒賀 龍太郎さん

京2020オリンピック・パラリンピックの事前キャンプに関わる協定を締結しています。協定は、事前キャンプに必要な施設などを市が提供することに加え、オーストラリアの選手が交流イベントに可能な限り参加することも盛り込まれました。私が「世界で結果を出したことが、このような国際交流が生まれるきっかけの一つになったのであれば、こんなにうれしいことはありません。

同様に、東京2020オリンピック・パラリンピックで結果を出すことは、京都と世界がつながるうえでの一助となるかもしれないという思いがあります。心身を成長させてくれた空手と、その過程を支えてくれた京都に貢献できる日を夢見て、自分を高めていきたいと思っています。

荒賀 龍太郎

1990年、京都市亀岡市生まれ。京都外大西高等学校在籍時、インターハイ・選抜・国体の高校全国8冠を獲得し、史上初となる3年間無敗を達成。京都産業大学1年生の時には、社会人も含めた日本最高位の大会である全日本空手道選手権大会において、史上最年少優勝の快挙を成し遂げた。世界選手権では2012年、2014年と決勝で涙をのんだものの、空手の東京2020オリンピック・パラリンピック正式種目採用が決まった2016年、悲願の世界一を獲得。現在は男子組手・84kg級の全日本強化選手として鍛錬を積んでいる。平成28年京都府スポーツ賞特別栄誉賞、平成28年京都市スポーツ最高栄誉賞受賞

オリンピック と文化創造

株式会社ニッセイ基礎研究所
研究理事

吉本 光宏さんに聞く



訳ですが、注目すべきポイントは三つ。一つは、すべての人々に文化を通じてオリンピックに参加できる機会を提供したこと。二つ目は、英国の人々が観客・聴衆としてだけでなく、一定の条件を満たせばその主催者として深く関与することが可能であったこと。そして三つ目は、自国の文化発信にとどまらず世界中の文化やアーティストを受け入れ、チャンスを提供したことです」。

ロンドン大会では、北京大会が終わった2008年9月から4年間、ロンドンだけではなく英国全土で、音楽、演劇、ダンス、美術、文学、映画、ファッションなど幅広い分野で膨大な数の文化事業が実施された。競技大会に参加した204のすべての国と地域から4万人のアーティストが登場し、参加者の総数は4,340万人にもなったという。

吉本さんは強調する。「オリンピック・パラリンピックは国際交流・相互交流の場。発信すると同時にいかに世界の人々を受け入れるかも重要だと考えています」。

社会課題に対してもたらされる 芸術ならではのソリューション

今やスポーツは、人與人、地域と地域の交流を促進し、地域社会の再生に寄与するものとして、また、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠なものとして、その社会的な役割が広く語られている。吉本さんによれば、最近では文化芸術が及ぼす社会的なインパクトにも注目が集まっていると言う。

その領域は実に幅広い。芸術の授業を受けた子どもの方が国語や算数などの成績が高いという調査結果があるほか、高齢者が芸術活動に参加することで、リハビリでは上がらなかった腕が上がるようになったり、芸術祭をきっかけに若い世帯が

オリンピック憲章には、「スポーツを文化と教育と融合させる」ことが明記されている。オリンピックがスポーツの祭典であるとともに文化の祭典でもあり、開催国に「文化プログラム」の実施が求められていることを認識している人は、決して多くはないだろう。

そしておそらく大多数の人が、それがどのような取組なのか、ピンとこないのではないだろうか。しかし、東京オリンピック・パラリンピック競技大会を2年半後に控えた今、関係機関では「文化プログラム」の検討・準備が進み、具体的な事業もスタートしている。組織委員会や東京都の文化プログラムに関わる吉本さんはこう語る。「ロンドンが2012年大会の招致に成功した大きな理由の一つは、彼らの提案した文化プログラムにあったと言われています。ロンドン大会はそれを実践した

過疎地に戻り休校になっていた小学校が復活したり…。『教育や福祉、地域創生といった現在の日本社会が抱える課題に対して、文化芸術ならではの様々な効果があらわれています。文化芸術はそれ自体に価値があるものですが、今まで以上に、その社会的な価値は高まっているのです』。

ここで注意すべきことの一つは、芸術だからこそ得られる効果に着目することだ。「例えば教育上、演劇は国語力を高めるうえで効果があると言われます。しかし本当に大切なのは、演劇をチームで作り上げる過程でコミュニケーション能力を培ったり、その楽しさを体感したり、迷惑がかかるから稽古を休まないという責任感が芽生えたりすること。つまり、演劇を通じてこそ得られるものを学び身に付けることが肝要なのです」。

そしてもう一つ、幅広い領域への効果が注目されるほどに重視すべきことがあると、吉本さんは念を押す。「そうした波及効果の起点となる芸術や文化そのものの振興です。それらの本質的な価値を見つめ、芸術や文化そのものにいかに投資し、サポートするかが重要なのです。」「確かに、文化芸術が多くの波及効果をもたらすという事実は、多様な文化プログラムを展開し、成功させることが、日本にとって今まで以上に意義深いものとなることを示しています。」「しかし、オリンピック・パラリンピックには終わりがあります。そこで発想を転換させて、全国各地で実施されるであろう大小の文化プログラムは、“オリンピック・パラリンピックのため”のものではなく、“各地域の住民とその地を訪れる人々のため”のもの、と考えてはいかがでしょうか。より身近なこととして捉え、継続することで、各地域で文化芸術が果たし得る役割も自ずと見えてくるはずです」と。

“世界と新たに会おう”場となり、 地方創生のモデルケースに

吉本さんは、「伝統として受け継がれているものがあると同時に、新しいものが生み出されていて、それがまた何百年という歴史の上に積み重なっていくこと、また“それを可能としてきた懐の深さ”こそが、京都の文化力の強さだと語る。

ただしそれらは、外からは見えにくく、その礎となっている価値観や美意識も伝わりにくい。そこで吉本さんが京都における文化プログラムとして提案するのは、町家を活用した「アーティスト・イン・レジデンス」だ。

「オリンピック・パラリンピックに参加するすべての国のアーティストを町家に招き、京都で暮らし創作する機会を提供してはいかがでしょうか。簡単ではないと思いますが、実現すればおそらく世界中のアーティストが手を挙げることでしょう。単発のイベントでは知り得ない京都の文化の奥深さを体感したアーティストは、帰国後、吸収したことを周囲に伝え、作品づくりに活かしていくはず。そうした活動の一つひとつが、京都で大型のイベントを行うより、京都の文化をより深く、長く海外に発信することにつながり、京都の新たな文化を生み出す国際交流の“種”になるのではないかと思います」。

加えて吉本さんは、京都の文化力にある期待を抱く。2021年度までに全面的に移転される文化庁により、広い視野で、文化芸術の本質的な価値に重点を置いた文化振興が実践されることだ。

「京都なら、文化芸術の波及効果による地方創生のモデルケースを示せるのではないのでしょうか。伝統を継承しながら、将来の伝統となる文化を生み出していく京都の文化力が、日本中を元気にする原動力となる日が来ることを信じています」。



京都文化力向上宣言

京都文化力プロジェクトをより発展させていくために、京都文化力プロジェクト実行委員会の関係者から、これからの京都の文化力をさらに向上させるためのメッセージをいただきました。

(五十音順、敬称略)



青柳 正規

前文化庁長官
東京大学名誉教授
京都文化力プロジェクト実行委員会 理事

去年の夏、我が家の犬が病気がかかっていることが判明して以来、夜の会食や外泊は避けるようにしている。爾来、会議などでのトンボ帰りは別として半年近く京都をご無沙汰している。これほど間があくことは久しぶりのせいとか、距離を置いて京都のことを考える余裕ができたようだ。というよりもなぜこれほどに京都想いにとりつかれるのだろうか、という疑問を考える余裕ができたといった方が正確なのかもしれない。

神社仏閣、祭りをはじめとする催事、食事、伝統的な芸能や工芸などさまざまな要素に思い当たるが、やはり街と周囲の山々が密接に繋がっているいわゆる里山文化の典型が京都文化ではないか、その都市文化と自然が融合している濃密な里山文化に私自身が憧れており、そのために時間をおいてしまうと京都に、というよりも里山文化の京都文化に想いをこらしてしまうのではないかとすることに最近気づいた。都会だけではなく、また自然だけでもない、両者が例えようもない調和のなかに融合して出来上がった京都文化に憧れてしまうのである。



有馬 頼底

京都仏教会 理事長
臨濟宗相国寺派 管長
京都文化力プロジェクト実行委員会 理事

仏教は人々にその教えを理解していただくために様々な方便を用います。方便とは真実の教えに帰入することによって初めて方便と言います。仏教から派生する文化もそうです。茶道、華道、香道、伽藍建築、庭園、換絵、墨蹟、金工、精進懐石料理等、職人と僧侶は互いに切磋琢磨し今日に伝わるものが数多くあります。その伝える精神とも言うべき華語に次の言葉があります。

『裂古破今』(古きを裂き 今を破る)というのは、伝統の教えに墨守し、それに執着しているだけではいずれその命を失う。また伝統を無視し今に執着し新しさにとらわれてもいけない。要するに過去とか現在とかそういう時間が問題なのではなく、いかに本質を追及し続けてゆくか。まさに、過去も現在も知り尽くした上で、さらに一步を進めることが肝要なのです。

私はかつて、相国寺六五〇年遠忌にあたり法堂解体大修理に携わりました。その折、法堂修理の足場を木と縄で組み上げることをあえて選択いたしました。これは昨今の寺社建築も時代の流れで、ステンレス足場が主流となりましたが実際は、足場を木と縄で組み上げることも伝統工法として保存されなくてはならないものなのです。低価格で素早く出来るステンレス足場に偏りがちな現代ですが伝統とはそうした流れに対し、いかに本質を追求し続けてゆくかなのです。

合掌

池坊 専好

華道家元池坊 次期家元
京都文化力プロジェクト実行委員会 理事

池坊のいけばなの心は、『池坊専応口伝』にある「枯れた花にも華がある」という言葉に集約されるように、「草花一つひとつ、あらゆる命に美を見出し、尊いものとして輝かせる」ことに尽きます。室町時代、池坊専慶によって日本独自の文化であるいけばなが成立してからおよそ555年、その心は変わることなく今に受け継がれてきました。そうしたいけばなの心を大切にしながら、しかしそれを伝える手法は時代に合わせて柔軟に変化させることで、より多くの方にいけばなを身近に感じていただきたいと考えています。

いけばなに限らず、文化には「時代を超える力」があります。決して過去のものではなく、日々花を生けたり、能や狂言を楽しんだり、今も人々の暮らしに根づいています。それこそが、京都の持つ文化の力ではないでしょうか。形あるものだけでなく、目に見えないものを尊び、自然や他者と調和しながら自らをも輝かせる。そんな文化に宿る日本人のこころ映えの美しさこそ、世界に伝えていきたいと思っています。



太田 達

公益財団法人有斐弘道館 代表理事
京都文化力プロジェクト実行委員会 特別委員

有斐弘道館は、現代に必要な文化芸術による「知」を再生するための新たな学問・文化サロンとして、茶事や講座をはじめとする様々な事業を展開しています。そのなかで、世界中から訪れる学者や文化人、経営者、一般の方々をゲストに迎え茶事を催す機会が数多くありますが、それぞれの茶事のテーマは思想であったり小説であったりと実に多岐にわたります。

そうした体験を通じて実感しているのが、茶道の持つ「文化を伝える装置」としての力の大きさです。そして、例えば茶事で出す菓子を作る際に材料の配合という化学の側面があるように、その実践においては、茶道を科学と芸術の両面から見るのが大切です。伝統文化における科学を文化力の基礎の一つと捉え、柔軟に学ぶことができれば、本当の意味での文化力向上につながるのではないのでしょうか。

今後も学問・芸術の両面から個々の文化力を高め、集合体である京都の文化力向上の一翼を担えればと考えています。

細井 浩一

立命館大学映像学部 教授
立命館大学アート・リサーチセンター センター長
京都文化力プロジェクト実行委員会 実施計画策定部会 委員

立命館大学には、浮世絵や古典籍、版木からデジタルゲームにいたる表現創作を日本文化資源としてアーカイブする研究拠点が 있습니다。アーカイブは単に文化を保存するための冷凍庫ではなく、生きた資料として研究者や社会が活用することを目的とするものです。京都は長きに渡って様々な日本らしい文化を育んで来ましたが、それらは個々別々に発展して来たわけではありません。それらは日本文化のプラットフォーム、例えば舞台芸術、書画、茶道・華道、俳諧、料理その他様々な営みとそれを支える人々の生活の中で統合され、独自の創造的価値を生み出しながら継承発展してきたのです。

振り返れば、登場した時はまったく新しいプラットフォームであった映画やビデオゲームの価値をいち早く見出し、その発展の土台を作ったのも京都でした。技術や社会の発展に背を向けず、絶えず前向きに新しい価値を付加して洗練させる。京都の文化力の根源がそこにあるとすれば、これからも古くからの文化が生まれ変わり、また新しい文化として創造され続けていくことでしょう。



京都文化力プロジェクト2016-2020が目指すもの

創造する文化 京都から世界へ

The Creative Power of Culture: From Kyoto to the World

「京都文化力プロジェクト」は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会等を契機として、日本の文化首都・京都を舞台に行われる文化と芸術の祭典です。

オリンピックは、世界最大の平和の祭典であり、スポーツの祭典であるとともに、文化の祭典でもあります。オリンピック憲章では、オリンピズムとはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を追求するものと規定しています。

2020(平成32)年に向けて、京都から多彩な文化・芸術を世界に発信するとともに、国内外の人々と交流・協働し、新たな創造の潮流を起こしていきたいと考えています。

3つの目標

世界の人々に
京都の魅力を伝え
もてなす基盤をつくる

世界の人々に
京都の総合的な
文化力を提示する

世界の人々と協働し
新たな創造の
潮流を起こす

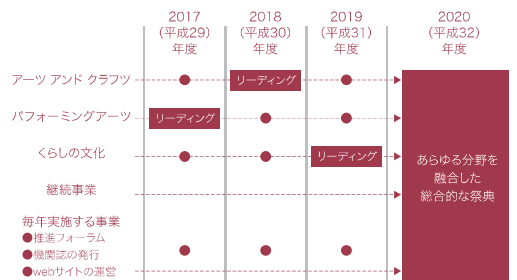
事業展開

現在「伝統的」と言われるものの多くが、創生当時「革新的」であったように、今、「はじめ、新しいものをつくる」ことが、100年後、200年後の未来につながっていきます。

京都文化力プロジェクト実行委員会では、悠久の歴史に育まれてきたヒト・モノ・コトを「美術・工芸」(アーツアンドクラフツ)、「舞台芸術」(パフォーミングアーツ)、日常生活の中に息づく「くらしの文化」による3つの分野の視点を中心に事業を展開していきます。

年度ごとに1つの分野に絞ったリーディング事業と合わせ、その他2つの分野のワークショップやイベントなど、様々な規模で実施しています。

継続性を必要とする事業は、2020年までの4年間でゴールを目指すとともに、2020年には、あらゆる分野を融合した総合的な文化芸術の祭典を計画。未来への遺産(レガシー)の布石となるよう、活動していきます。



京都文化力プロジェクト実行委員会への入会について

京都文化力プロジェクト実行委員会の趣旨にご賛同いただける団体、企業、個人を募っています。ご賛同いただける場合は下記URLからお願いします。(入会費・年会費不要)
※会員には、beyond2020プログラム(京都文化力)に認証された事業を定期的に配信します。
▶詳しくは <http://culture-project.kyoto/pages/entry/>



beyond2020プログラム(京都文化力)の認証について

京都文化力プロジェクト実行委員会では、2020年以降を見据えた文化プログラムを「beyond2020プログラム」として認証しています。認証を受けることで、ロゴマークを活用した広報や、本実行委員会ホームページのほか、全国の文化プログラムを集約・多言語化するポータルサイト「Culture Nippon」などに掲載され、広く事業がPRできます。

▶詳しくは http://culture-project.kyoto/pages/entry/entry_beyond.html



これまでの活動

2013年(平成25年)

9月 東京2020オリンピック・パラリンピックの開催決定

2014年(平成26年)

8月 「京都文化フェア」呼びかけ



10月 「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会設立(ワーキング会議設置)

2015年(平成27年)

9月 基本構想中間公表
(・イベントアイデア事業(9月~12月)
(・ワークショップ開催(3回)(10月~12月))

2016年(平成28年)

3月 基本構想策定

5月 京都文化力プロジェクト実行委員会設立(理事会開催、部会設置)

10月 実施計画(総論)策定
スポーツ・文化・ワールド・フォーラム開催



10月~2017年3月 ワークショップ開催(3回)

2017年(平成29年)

1月 大学生による京都文化の発信・体験プランコンテスト開催

3月 機関誌 Vol.1 発行

4月 第1回推進フォーラム開催



6月~10月 公式ポスターデザインコンテスト開催



8月 beyond2020プログラムの認証申請受付開始

8月・9月 「東京キャラバン in 京都」開催



12月~2018年3月 “伝統×最先端”球乗り型ロボット衣装デザインコンペ開催



2018年(平成30年)

2月 第2回推進フォーラム開催
公式ポスターデザインコンテスト表彰式



4月 マルチリンガル伝統文化ウィーク in 二条城実施(仮称)(予定)

京都文化カプロジェクト 2016-2020 Vol.2

発行 | 平成30年2月

京都文化カプロジェクト実行委員会

〒604-0862 京都市中京区烏丸夷川上ル 京都商工会議所ビル4階
TEL: 075-354-5413 E-mail: info@culture-project.kyoto
FAX: 075-354-5414 U R L: <http://culture-project.kyoto/>

本誌掲載記事・写真等の無断転載、複写を禁じます。

表紙デザイン: 京都市立芸術大学 郡司 穂子
公式ポスターデザインコンテスト 最優秀賞